



「黄安先生（河童百図第99図）」個人蔵



「唐花打板雲文様段替厚板唐織」（一部）
当館蔵

目次

- ① 特別展 「小川芋銭」展示紹介
- ② 史料紹介展 「行政資料にみる茨城の鉄道」
- ③ 史料紹介 「府中松平藩御家御定書」
- ④ 資料紹介 「三村山清冷院極楽寺跡出土瓦」
- ⑤ トピックス
- ⑥ 寄稿 「歴史館ボランティアについて」

茨城県の牛久に住み、カッパの絵描きとして知られる小川芋銭（おがわうせん 1868-1938）、その芋銭を代表するのが、「河童百図」です。芋銭は、画商・俳画堂の特別の求めに応じて、河童絵を100枚描きました。芋銭が亡くなる年、この河童絵100枚を集めて、『河童百図』という画集が刊行されました。

実はこの「河童百図」、そのいずれもが、芋銭のすばらしく豊かな教養に裏付けられて描かれていますので、作品を解説することがとても難しいのです。この度の展覧会では、敢えてこの難問に挑戦しました。その結果、今まで知られることがなかった、「河童百図」の秘密が、次々と明らかになりました。

このように書くと、「難しいかな?」と思われるかもしれませんが・・・、でもだいじょうぶ! 展覧会場では、多くのパネルを使って、「河童百図」の楽しみ方を、分かりやすく紹介します。中には、思わず吹き出してしまいそうな作品もあります。

この展覧会では、「河童百図」42点と、各図の背景となった資料を多数展示します。そのほとんどは、初公開のものばかりですので、どうぞ、ご期待下さい。



第80図「浪裡白跳」 秋田県立近代美術館蔵

「浪裡白跳（ろうりはくちょう）」は、中国の書物『水滸伝（すいこでん）』に登場する人物で、全身は真っ白、カッパに負けない泳ぎの名手です。

その「浪裡白跳」の雪のように白い尻に、カッパが見ほれています。ちょっと危ない趣味かも? いいえ違います。実は、肛門の近くにあると言われる、カッパの大好物、「尻子玉（しりこだま）」を抜き取るチャンスを、うかがっているのです。

芋銭の愛蔵書中にも、『水滸伝』がありました。



第30図「山姥とカッパ」 愛知県美術館蔵（木村定三コレクション）

「山姥（やまんば）」とは、奥深い山にすむと言われた鬼女のことで、非常に大女で、二つの山に足をかけ、間を流れる川で髪を洗ったという話も伝えられています。

絵の中には、岩のような、また山のようなものが二つと、その間に、川の流れるようなものがあります。もし、この話を知らなかったら、何の意味があるのか理解できないでしょう。

もう一つ、大切なことですが、この絵は、葛飾北斎（かつしかほくさい）の著した『北斎漫画』中の「山姥」を参考に描かれています。芋銭の芸術に、北斎の影響があることなど、かつて誰も想像したことがありませんでした。



「山姥」『北斎漫画』より

今回の展覧会では、「北斎と芋銭」というコーナーを設けます。これは、本展の見所の一つとなります。



第66図「牛股武左衛門」

「牛股武左衛門（うしまたぶざえもん）」は、江戸時代の力士。牛を平気でまたいでしまうほどの大男でした。

あるとき、カッパが武左衛門に相撲を挑みました。しかし、カッパが大勢でかかっても、武左衛門を打ち負かすことはできません。ガッカリして帰るカッパ達をみながら、武左衛門が水辺で手を洗おうとしたその時、アッという声と共に、水中に消えてしまいました。大力の武左衛門でも、水中ではカッパにかないません。

九州のカッパ伝説から生まれた作品ですが、『松屋筆記』という、江戸時代の随筆が背景にあります。

交通のご案内

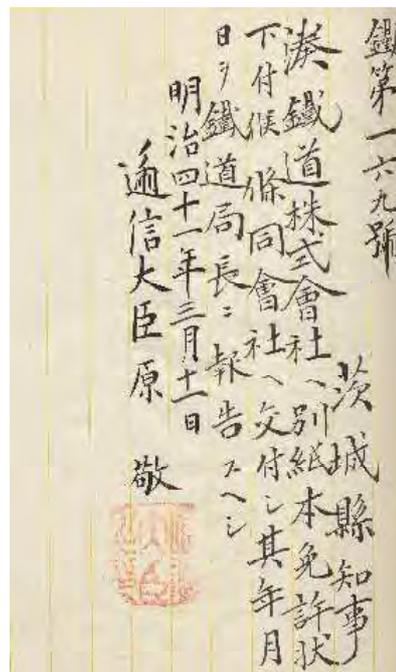
- ◎茨城交通バス、茨城オートバス（水戸駅北口4番のりば）から赤塚・茨大（新原経由）行き乗車、「大工町3丁目」下車、徒歩3分。桜川西団地行き乗車、「歴史館・偕楽園入口」下車、徒歩2分。
- ◎常磐自動車道水戸インターから約7km、車で15分。



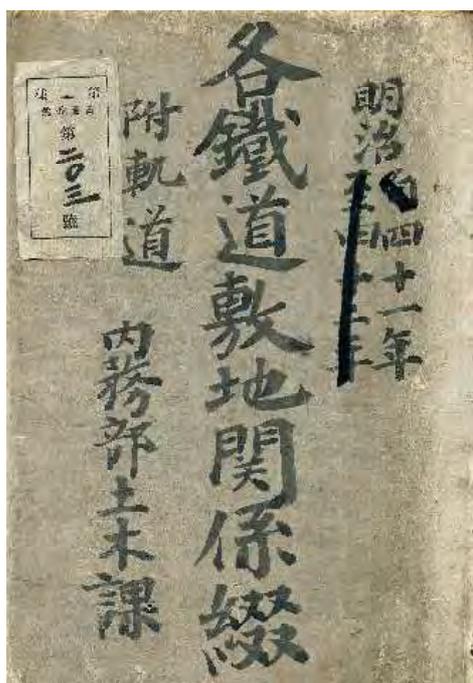
史料紹介展

「行政資料にみる茨城の鉄道」

「鉄道敷設関係書類」、「鉄道回議綴」、「鉄道省関係綴」……。歴史館には、明治から昭和初期にかけて県が作成した、鉄道に関わる行政文書が多数残されています。今回の史料紹介展では、それらの行政文書をはじめ、平成17年に開業したつくばエクスプレスに関する、県や関連企業の発行した刊行物など、館が所蔵する行政資料を中心に、写真や地図、時刻表、観光案内といった鉄道関係の資料も織り交ぜながら、明治から現代に至る茨城の鉄道のあゆみをたどります。また、明治時代に計画されたものの、完成を見ることのなかった、いわゆる「幻の鉄道」についても併せて紹介します。



湊鐵道株式會社へ本免許狀下付ノ件



明治41年～明治42年各鐵道敷地等關係綴 附軌道(一)

府中松平藩 御家御定書

「御家御定書」は府中松平藩士前野持信の手控・備忘録です。現在、寛政元年(1789)から文化14年(1817)までと天保11年(1840)から弘化4年(1847)までの分が4分冊で石岡小学校に所蔵されていたものを本館寄託史料として公開しています。

内容は藩士および村役人に対する諸法令・通達が大部分で、年度ごとにまとめられ、分冊ごとに表題が付されています。いずれも美濃紙使用で、手控帳として製本したものに書き写したと思われる。第1分冊は横袋とじ状で「寛政元年より享和三亥年迄 御家御定書抜」という表題、第2分冊は堅袋とじ状で表題欠(享和4年より文化7年まで)、第3分冊も第2分冊と同形態で「文化八より同十四迄 御家御定書」の表題、第4分冊は第1分冊と同形態で「天保十一子年より弘化四年羊年迄 御家御定書」の表題がついています。寛政元年以前また弘化四年以降については不明ですが、文化15年から天保10年までの22年間の記述があったことは容易に想像されます。

編者の前野持信については職分・履歴ともに不明ですが、本館所蔵「府中松平家中大和田家文書」の「土族印鑑 明治二年石岡藩会計局」に、定期的に持信の子とみられる前野織右衛門持^{ヨシ}衡の名が記載され、また「明治二巳初春念五人員禄高換書」(石岡市森家文書)には、「金七両三人扶持御徒目付組頭前野織右衛門」とあり、中級の藩士であったことをうかがわせます。

この「御家御定書」から興味ある史料をひとつ紹介しておきましょう。それは文化12年9月15日の藩士に対する親類書・縁者書の提出命令です。これが府中松平藩独自のものであったのか、それとも連枝を含む水戸家全体に行なわれたものなのかは確認できません。通達は次の文言に始まります。「御家中之面々御譜代以上之分自今以後又従弟迄之属合親類書御目付所江差出置可申候」。そして案文(雛形)を示し「別紙案文之通拾五枚切美濃紙岩城紙之内堅帳二相仕立指出置出生死亡等二而枉ひ出来候ハ、年々三月中相改差出」すものとなりました。

案文は次のようなものでした。

親類書	姓名
縁者書	

本国 実子惣領 養子二候ハ、養子与認可申候
 生国 誰 亥歳

親類書
 一 祖父 私曾祖父誰死惣領 ————— 死
 一 祖母 何之誰死娘死

一 父 私祖父誰惣領 —————
 一 母 何之誰娘
 一 継母 ————— 娘
 一 妻 ————— 娘
 一 嫡子 —————
 一 姪 嫡子誰妻 ————— 娘
 一 孫 嫡子誰悻 —————
 一 次男 何之誰養子
 一 女子 何人 手前二罷在候
 一 弟 —————
 一 姉 誰殿家来 何之誰妻
 一 妹 何人 手前二罷在候
 一 異父兄弟姉妹 —————
 一 甥 私弟誰惣領 何之誰
 一 姪 私姉誰娘 ————— 妻
 一 又甥姪 私甥姪誰悻娘 —————
 一 叔父 私祖父誰死 何之誰養子—
 一 伯母 右同人娘 ————— 妻
 一 従弟 私叔父誰惣領 —————
 一 従弟 右同人次男 —————
 一 従弟女 右同人娘 ————— 妻
 一 従弟 私伯母誰惣領 —————
 一 従弟違 私従弟誰悻 —————
 一 従弟違女 右同人娘 —————
 一 大伯父 —————
 一 大伯母 —————
 一 従弟違 私大叔父誰惣領 —————
 一 従弟違女 右同人娘 —————
 一 又従弟 —————
 一 又従弟女 —————

以上は父方の例ですが、母方についても同様に書き出し、養子の場合は実父方、実母方も父方同様の形式での報告が命じられています。

また「縁者書」は

一 舅 妻之父 —————
 一 姑 同母 ————— 娘
 一 小舅 同兄弟 —————
 一 小姑 同姉妹 —————
 一 舅 嫡子誰実之父 —————
 一 姑 同母 —————
 一 小姑 同兄弟 —————
 一 小姑 同姉妹 —————

という案文(雛形)でした。ちなみに、現在旧藩士の家々にはこの下書・控が数多く残されており、府中松平藩家臣団の概況を知る上で、きわめて興味ある史料となっています。

この「御家御定書」は本館発行の「茨城県立歴史館史料叢書10 府中松平藩史料」に全文収録されています。

(歴史資料室長 桜井 明)

所蔵資料紹介

みむらさんせいりょういんごくらくじ 三村山清冷院極楽寺跡出土瓦

つくば市小田，筑波山系のひとつ宝鏡山（小田山）の麓に，かつて巨大な寺院が存在しました。三村山極楽寺と呼ばれます。

現在は山林，あるいは田畑となり，伽藍はまったく失われています。しかし，その旧寺域や小田集落にはさまざまな遺物がみられます。まず、宝鏡山頂には，高さ 2.5 メートルを計る宝篋印塔があります。鎌倉時代後期の作と推定され，茨城県内では最古の宝篋印塔となります。また，旧寺域には鎌倉時代末期の巨大な五輪塔があり，高さは 3 メートルを超えます（この 2 基の石造物は，当館常設展「茨城の歴史をさぐる」でもレプリカとして御覧になることができます）。このほか，石造地蔵菩薩像（正応 2 年銘 = 1289），小田集落の寺院・神社に移された石燈籠，不殺生界石なども残され，在りし日の極楽寺の繁栄を垣間見ることができます。

この三村山極楽寺と密接な関係にあるのが，忍性（にんしょう）という僧侶です。忍性は大和国（奈良県）の出身で，西大寺の叡尊（えいそん）の弟子として，律宗の布教に取り組みました。律宗とは仏の教えであり，併せて僧侶として守らなくてはならないさまざまな仏の戒めを説いたものです。鎌倉時代になりますと，いわゆる新仏教という国家・政治体制より個人の救済を目的とした教えが広まりました。そのため，仏教による社会秩序の維持が危うくなってきたのです。叡尊はそれを嘆き，鎌倉幕府も体制維持を図るためにも大いに律宗に期待したのでした。

こうした思想的，あるいは社会的背景のもと，建長 4 年（1252），忍性は常陸国に布教のためにやってきました。そして三村山極楽寺の子院である清冷院に入りました。そしてここを東国における律宗布教の拠点としたのです。以後，弘長元年（1261）に拠点を鎌倉に移すまで，忍性は常陸国を中心に律宗を広めていくわけです。

忍性は布教とともに，土木工事，あるいは社会事業にも積極的に関わりました。そのため，忍性にはさまざまな技術を持つ職人集団を組織していたようです。前述した石造物は，大和国から招いた石工によって作られたものとみられます。

こうした石造物とともに注目されるのが，伽藍を荘厳したさまざまな瓦です。これも忍性に関わりの深い瓦職人によって製作された可能性が高いのです。

これらの極楽寺の瓦に関しては，すでに江戸時代後期，小田村出身の農政学者・長島

尉信（ながしまやすのぶ）が興味を示し、自著『小田事跡』のなかで、瓦の拓本などを紹介しながら、往時の極楽寺、そして外護者であった小田氏への考察を述べています。つまり、極楽寺の瓦は江戸時代から注目されていたのでした。



軒平瓦 画質を落としています。

そこで、当館所蔵の瓦のうち、主な3点を紹介いたします。

まず、軒平瓦です。縦9 cm、横16 cm（以上残存部）、瓦当^{がとうめん}面厚さ6 cmを計ります。下向き剣頭文と呼ばれる、ちょうど剣を逆さまにしたような陽刻の文様が並び、そこに「清」という字が陽刻されています。この瓦自体、全

体の一部ですので、当然「冷」「院」という文字もあったはずですが、様式的には西暦1200年代前半から半ばころの作です。忍性が清冷院に入るときか、その直前に建てられた（あるいは葺き替えられた）堂宇に使われていたと思われる。



平瓦1 画質を落としています。



平瓦2 画質を落としています。

次に、平瓦1です。縦37cm、横18cm(残存部)、厚さ2.3cmを計ります。「三村山」「清冷院」の文字が残存したなかで3行にわたって陽刻され、間を同じく陽刻による交差線と枠線で区画しています。こうした文様付けは瓦を作る工程のうち、焼成前、表面を叩いて粘土を締める過程でなされます。叩く板には「三村山」「清冷院」と印刻されていたわけですが、これは印鑑と同じく反対に文字が彫られていたのです。

これと同じタイプの平瓦は他所でも比較的多く見つかっていますが、縦の長さが確認できるものとしては現在唯一です。西暦1200年代後半から、1300年代にかけて作られたと思われます。

最後に、平瓦2を紹介します。縦30cm、横23cm、厚さ2cmを計る、ほぼ完形の平瓦です。

表面中央に凸線による「極楽寺 正和三年^甲_寅(四)月十^日

さて、正和3年段階では、すでに忍性は亡くなっていました(没年は乾元2年=1303)。さらに、忍性自体が三村山極楽寺を離れてからでも50年以上が過ぎています。それでも、嘗々と伽藍が嘗まれ、そこで瓦も作られていたわけですが、そして、この瓦から、清冷院だけでなく、三村山全体が律宗化していた可能性も考えられます。

最初に述べましたとおり、三村山極楽寺の伽藍は今日では全く失われています。しかし、忍性や、その傘下の職人集団によって、鎌倉時代の筑波山の麓に、当時の最先端の技術が導入されたのです。その影響がその後の歴史にどのように影響したかについては、今後研究を深めていかななくてはなりません。しかし、少なくとも忍性を迎え、そしてその技術を受け入れることのできた、鎌倉時代の茨城の先進性だけは確かなものといえるでしょう。

(首席研究員 飛田英世)

トピックス

小・中学生体験歴史館コンサート

5月6日、小中学生による体験歴史館コンサートが開かれました。このコンサートは、昨年度まで、歴史館まつりの一事業として実施しておりましたが、気候が涼しい時期にゆっくり楽しんでいただけるように、今年度は連休中に開催いたしました。

歴史館所蔵の1865年製スタインウェイ&サンズ社のグランドピアノを弾くことのできる貴重な機会ということで、定員を大幅に超える応募があり、演奏者は抽選によって選ばれました。

演奏者に選ばれた子どもたちは、日ごろの練習の成果を十分に発揮し、3回実施されたコンサートすべてにおいて、素晴らしい演奏を聞かせてくれました。

演奏後も「思い出に残った」「貴重なピアノが弾けてうれしかった」などの感想が聞かれ、また保護者の方々もわが子の晴れ舞台に十分満足することのできたコンサートでした。

今年度、9月22日(土)23日(日)、11月17日(土)18日(日)の4日間、午後2時から午後4時まで、このピアノの演奏体験を実施いたします。このピアノを弾いてみたいという小中学生のみなさんは、是非ご参加下さい。お待ちしております。



歴史館探検ツアー



お天気にも恵まれた6月3日、歴史館探検ツアーを開催いたしました。参加された36名は、当館展示解説員の案内で、普段は入ることや、見ることのできない考古収蔵庫や貴賓室、機械室などの探検を楽しみました。

今年度第2回目の探検ツアーを10月20日(土)に実施する予定ですので、歴史館の裏側をのぞいてみたい方は、是非ご参加下さい。

テーマ展 「ふれて 学んで たしかめて」 開催

ガラスケースに入っているモノを「見る」だけの展示から、五感を使って「感じる」展示を目指した初めてのテーマ展「ふれて 学んで たしかめて」を5月19日(土)から6月29日(金)まで開催いたしました。このテーマ展では、貝塚の貝層標本やさまざまな土器に触れたり、昔の文字の解読に取り組んだり、目に見えない絵や文字を赤外線カメラで調べたりする体験活動を通して、歴史を身近に感じていただきました。なかでも、会期中2回実施した「よろいかぶと体験」には、多くの参加者が集まり、戦国武将の気分を味わいながら、教科書の勉強とはまた違った歴史のおもしろさを感じることができました。



歴史館ボランティアについて

横田 良美

私が歴史館のボランティアに参加するきっかけになったのは、昨年、歴史館のホームページで「歴史館ボランティア」の募集をみつけたことでした。ちょうど、大学で主に歴史について勉強しており、ゆくゆくは学芸員の資格を取りたいと考えていたので、歴史館ボランティアは将来に役立つのではないかと思いました。しかし、同時に今までボランティア活動をしたことがなかったので、どのような活動を行うのか、自分にちゃんと務まるのか不安に思いました。そのため、歴史館の担当者の方に電話でボランティア活動について問い合わせをしましたが、その際に丁寧に対応していただき、また「ボランティア活動は無理をせずにできる限りの範囲でかまわない」ということを聞いて、歴史館ボランティアに応募することにしました。

最初のボランティア活動は昨年の8月に行われた「歴史館まつり」での、チラシ配りでした。歴史館ボランティアの活動は昨年からはまったものであり、私たちボランティアも歴史館の職員の方も手探り状態でありましたが、生涯学習センターなど他のボランティアの活動をお手伝いさせていただくことにより、ボランティア活動というものを学ばせていただきました。

そのほか、昨年は特別展「縄文のムラ・弥生の村」の講演会に参加させていただきまして、今まで知らなかったことが分かり、自分の知識を広げることができました。また、私は参加することができませんでしたが、12月に行われた「歴史探検バスツアー 利根川地流域の歴史と民俗をたずねる旅 - 取手宿と民俗学者柳田国男をはぐくんだ布川河岸周辺の散策 - 」はとても有意義なものであったと、他のボランティアの方からうかがいました。

そして、今年のボランティア活動については、まず2月に友部のサービスエリアで行われた茨城観光PRで歴史館のチラシ配りを行いました。ちょうど、歴史館では特別展「すもう今昔」、一橋記念館では雑祭りに関する展示が行われていました。チラシ配りはまだ2月で寒く少し疲れましたが、職員の方から、自分たちが配ったチラシがきっかけで歴史館に来てくださったお客様もいたと聞き、嬉しく思いました。また、同様に茨城観光PRに参加している他の団体の方々ともお互いに協力しながらPRを行えたことが、よかったと思います。

次に、今年のボランティア活動の目玉とっての過言ではない、「甲冑体験」について述べたいと思います。「甲冑体験」とは、歴史館で購入した体験用の甲冑を小・中学生に着てもらい、甲冑及び歴史に興味を抱いてもらおうという趣旨で行われているものです。体験用のものとはいえ、甲冑に触れるのは私たちボランティアも初めてであり、甲冑の着方を事前に歴史館の職員の方と練習しました。練習では何とか一通り甲冑の着方を覚えることができましたが、実際に子供たちを相手にしてできるか不安でした。しかし、5月4日に実際に子供たちを相手に甲冑体験を行うと、最初こそ上手くできませんでしたが、徐々に甲冑の説明を行いながら、子供たちに甲冑を着てもらえることができました。これには、甲冑体験に参加してくださった子供たちや保護者の方々の力も大きかったと思います。興奮し

ながら甲冑を着る子供たちと、それを見守る保護者の方々の嬉しそうな姿が私たちボランティアの励みになりました。歴史館内にある壁が石垣に似ていて、その前で子供たちが写真をとるのですが、子供たちが甲冑を着て、刀を構えた姿はとても勇ましく感じました。男の子だけでなく、女の子も参加してくださって、女の子が甲冑を着ている姿もとても似合っていました。また、5月5日の茨城県立図書館で行われた「子ども読書フェスティバル」でも多くの子供たちと保護者の方が参加してくださって、喜んでいただけたのがとても嬉しかったです。6月10日・24日にも歴史館で甲冑体験を行いました。両日ともに盛況でした。2月に行われた茨城観光PRでのチラシ配りやこの甲冑体験を通して、ボランティア活動の楽しさを学びました。

今年のボランティア活動の大きな目標は、8月19日に歴史館で行われる「歴史館まつり」で、甲冑体験と勾玉作りを行うことが決まっていますので、それを成功させることです。勾玉作りも実際に歴史館の職員の方に指導していただきました。勾玉作りは少し難しいですが、やってみるととても楽しいものです。この楽しさを子供たちだけでなく、歴史館に来館してくださったお客様に伝わるように頑張りたいと思います。

私たち歴史館ボランティアは昨年に始動しはじめたばかりなので、できることはまだ限られているのが現状です。歴史館で開かれる講習会に参加して、史料修復等を教わっている状態ですが、今後はそれらで学んだ知識を活かし活動の幅を広げていきたいと思っています。そして、子供たちだけでなく、多くの方に歴史に興味をもっていただけるように、また現在、歴史に興味を持っている方のお役に立てるように頑張っていきたいと思っています。